



人喰い島の漂流者

吸血鬼により貪り喰われる美女

大黒達也

人喰い島の漂流者

『作品紹介』

不良中年でヴァンパイアの大黒達也が、バンクーバーへと向かう機内で知り合った、うら若き美女 村上 忍と恋に落ちる。嵐と機械トラブルのため、旅客機は墜落し、二人は無人数島に流される。ただし、生存者は二人だけでは無かった。護送中の凶悪な犯罪者や若く美しい乗客達も含まれていた。絶海の孤島で、生き残った者達によるサバイバルゲームが幕をあける。「M i s a k o」シリーズの番外編。

『登場人物』

大黒 おおぐろ 達也 たちなり

不良中年で、お人好しのヴァンパイア。拳法や射撃の腕は超一流。

村上 むらかみ 忍 しのぶ

一流モデルや美人女優も及ばぬほどの抜群のプロポーションと美貌の持ち主。職業はOL。年齢二十三歳。

近藤 こんどう 圭吾 けいご

大黒の親友であり、元産婦人科の医師。剣道の達人。

ベロニカ サンダース

バイセクシャルで凶暴な性格の持ち主。燃える

ような金髪を持ち、極上の容姿を持つ女。犯罪者達のリーダー的存在。

ステラ シンプソン

ベロニカと同じく、男でも女でも抱けるバイセクシャル。ベロニカに劣らぬ美貌の持ち主。

アル レイノルズ

性的犯罪を繰り返す凶暴な犯罪者。性交奴隷とした女達に陵辱の限りを尽くす。

その他大勢の美女達

犯罪者達の性交奴隷とされ、最後には食糧として、食される若くて美しい女達。

『本編』

第一章 出会い

初夏の成田空港には、夕刻であるというのに、強烈な陽光が燦燦と照り付けていた。ロビー内にある搭乗窓口は外界とはうってかわり、適温に保たれていた。

搭乗窓口近くにある身障者用トイレでは、二十歳くらいの若い二人の女達が絡み合っていた。ひとりは全裸でもうひとり衣服を着ていた。二人とも美しい容姿をしていた。

全裸の女は、猿轡を噛まされ、後ろ手を縛られ洗面台の上に座らされていた。もうひとりの女が、全裸に剥かれた女の太腿を広げ、膺やクリトリスを美味しそうに舐っていた。

女は、何度も逝かされたようで、視線が宙を漂っていた。衣服を着た女が、クリングスをしながら、指先を女のアヌスに差し入れた。

全裸の女は、全身を震わせ白目を剥いて失神した。女は全裸の女を洗面台の上うつ伏せの姿勢で横たえた。バックから小型ナイフを取り出し、

盛り上がった白い尻に小さな切り傷を付けた。

傷口に浮き上がる鮮血を舌の先で絡め取った。傷口に吸い付き音を立てて吸った。女の唾液には、血液の凝固を防ぐ成分が含まれていた。傷口は小さくとも血がとまることは無かった。暫く吸った後で傷口にバンドエイドを張って止血した。

今度は女の形のいい片足を持ち上げて、股間に傷を付け喰い付いた。すぐに血を啜る音が聞こえてきた。暫く血を啜った後で、満足げな顔を上げた。

意識が覚めない女の頬を叩いて目覚めさせた。洗面台に横たわる女の裸身を携帯のデジカメに収めた。膣やアヌスに指先を挿入しての撮影も行った。

さらにバックから浣腸器を取り出し、女に見せ付けた。猿轡を噛まされた女は憑かれたようにそれを見詰めていた。女の尻を片手で割り、アヌスを十分に舐った後で、それを挿入し中身をすべ

て注入した。女が猿轡の下から低い呻き声を上げた。女の盛り上がった白い尻が無残に震え慄いていた。

暫くして女が呻き声を上げ、全身を震わせ始めた。女の裸身を軽々と抱き上げ、便座に座らせた。太腿を大きく開かせ、スマホのデジカメを向けた。女が苦悶の表情を浮かべながら、背筋を仰けらせた。スマホのデジカメはアヌスから迸る排泄物を捕らえていた。

排泄を終え脱力した女のアヌスをウォッシュレットで洗浄してから、女にスマホのデジカメで撮影した一部始終を見せた。

「誰にもこのことを話さない方が身のためよ。貴女、丸の内に勤めるエリートOLよね。会社にばら撒かれるのが嫌なら逆らわないことね」

衣服を着た女が、便座に座った全裸女の盛り上がった乳房を触りながら言い聞かせた。女は虚ろな表情でゆっくりと大きく頷いた。

「聞き分けのいい娘ね。今夜八時にこのホテルのロビーで待っていていなさい」

女にホテル名が書いてあるメモと、現金十万円を手渡した。

衣服を着た女は空港のロビーで、この女に声をかけ、言葉巧みに身障者用トイレに連れ込んでいた。後はしたい放題に女を犯し、その血を啜り楽しんだ。

女は暫くの間、この女で楽しもうと考えていた。若く瑞々しい肉体と蜜のように甘い鮮血を心行くまで味わおうとしていた。ただし、最後には大金を握らせ解放するつもりであった。生命に関わるような危害を及ぼすことは考えていなかった。

搭乗窓口では大勢の客達に交じり、絶世の美女ふたりと彼女達の連れ合いと思われる二人の中年男が立ち話をしていた。

男二人は百八センチほどの引き締まった肉体をサマースーツに包み、女二人は、薄皮製のミニスカートに艶やかな色合いのシャツを着ていた。

彼女達のうち一人は、先ほどまで身障者用トイレで若い女を犯していた女であった。四人ともサングラスをかけていた。男の一人は、まだ四歳くらいの女の子と手を繋いでいた。

男二人は大黒達矢と近藤圭吾であり、女二人は彼らの伴侶である大黒美佐子と近藤美由紀であった。

四人の男女と一人の娘は、外見上は普通の人間に見えるが、実はヴァンパイアの血を宿していた。

「近藤。俺はファーストクラスの金を渡していた筈だぞ」

一人娘のあすかと手を繋いでいた大黒が、近藤に食ってかかった。

「そう、むくれるなって。満席で取れなかったのさ」

「達也。そろそろ時間よ」

一人の美女が二人の会話に割って入った。大黒の妻である美佐子であった。

「そうだな。そろそろ行くか。あすか。ママの言うことを聞くんだぞ」

「パパ。何処に行くの？」

少女が、大黒の顔を見上げた。

「カナダという国だよ。きれいな森と湖があつてね。パパは先にそこに行ってあすかやママが来るのを待っているからね」

達也は腰を屈め、サングラスを外して、少女の円らな瞳を見詰めながら答えた。

「パパはね。そこで新しいお家を探すのよ。そこで皆で暮らすの」

美佐子も達也と同じように少女と視線を合わせた。

「圭吾おじちゃんや美由紀おねえちゃんや他のお姉ちゃん達も？」

「そうよ。皆一緒よ」

隣で聞いていた美由紀が、会話に参加してきた。

「じゃあ。そろそろ、行くよ」

大黒がポストンバックを手にして、搭乗窓口に向かって歩き出した。

機内では、大黒がチケットに示された座席番号

を見ながら、席を探していた。席は扉の近くだったのですねに見つかった。

通路側の隣席に二十代前半くらいに見える若い女が座っていた。

女の顔を見て大黒の動きが止まってしまった。それほどまでに女は美しかった。美しい切れ長の二重瞼を持ち、鼻筋がきれいに通っていた。唇も厚からず薄からず絶妙なバランスを保っている。セミロングの少し茶系に染めた髪を自然な感じで肩に垂らしていた。今流行の美人女優や一流モデルにも引けを取らない美貌の持ち主であった。上下黒系のスカートとシャツをセンスよく着こなしていた。

「失礼します」

大黒は、女に声を掛けながら、窓際の席に座った。

暫くして、大黒を乗せたバンクーバー行き国際便が滑走を始めた。すぐにガクンといった感じで飛び上がった。

窓の外には、夕日に照らし出された雲一つ無い

空が広がり、眼下には青々とした太平洋が見えていた。大黒は女の視線を感じ、振り返った。女は、窓の外に視線を向けていた。

「席を替わりましょうか？」

「いいんですか？」

女は眩暈を覚えるほど、澄み切った笑顔を向けて来た。

「トイレに行くには、通路側の方が便利ですから」「済みません。空がもの凄くきれいに見えたので」

大黒は席を代わるとき、女の身長が百七十センチぐらいあり、手足がすらりと伸びて美しい肢体を持っていることを確認した。好みの女であった。それも最大級の。これで八時間あまりの長旅を快適に過ごせると思った。

「俺は大黒達也。お嬢さんは？」

「村上忍です」

「忍ちゃんは、旅行か何かでバンクーバーへ？あつ。失敬。海外の生活が長いもので。つついっつアーストネームで呼んじやうんですよ」

「海外ってどちらですか？」

「北海道！」

大黒は大真面目な顔で答えた。忍が一瞬、息を呑み、すぐに口元を押さえながら笑い出した。

「可笑しな人……」

「根がオジサンなもので、美女を前にすると、つい調子に乗ってしまうんだな、これが……」

「けっこう、若く見えますよ」

「四十四歳の不良中年です」

「まあ。三十代にしか見えませんでした」

「お世辞でも嬉しい。あのお……」

「あっ。私ですか。今年で二十三歳になりました。バンクーバーへは、姉の結婚式に出席するためです」

「へえ。お姉さんバンクーバーに住んでいるんだ」

二人は短時間で、親しくなっていた。大黒は不思議だった。会話の断片から、この娘とは波長が合うと感じていた。エコノミークラスを取った近藤に感謝の念を抱いていた。それから暫くの間、大黒は忍の年代に合いそうな話題について、面白おかしく語って聞かせた。

第二章 漂着

陽が沈み、ほどなくして機外は暗闇に包まれた。

大黒は、少しの間、仮眠を取っていた。美佐子との出会いや、食人鬼や吸血鬼達と戦う夢を見ていた。目覚めてから忍の方を見ると、分厚い単行本を読んでいた。

「何読んでいるの？」

「ホラーです。吸血鬼ドラキュラ」

「ホラーが好きなんだ。吸血鬼ドラキュラと言えば、名作の部類だね。吸血鬼を一躍有名にしてくれた」

「友人がくれたんです。怖い話は好きですけど。ホラー小説はあまり読みません。大黒さんはホラーを？」

「いや。俺もあんまり読まないな。吸血鬼ドラキュラは読んだけど。オドロオドロしい描写は一級品だよな。でも吸血鬼についての記述は今一だな」
「どうしてですか？」

忍は本を膝の上に置いて、大黒の顔を見詰めた。
「それはね。吸血鬼を神に反逆する悪魔としてと

らえているからさ。吸血鬼は人間には無い筋力や、再生能力を持っているが、神秘的な存在では無い。特殊なウイルスの為せる技さ」

「そんな学説でもあるのですか？」

「無いよ。かく言う俺がヴァンパイアだからさ」

大黒はウインクして見せた。

「まあ。冗談ばかり」

忍が嬉しそうに笑みを見せた。

忍が席を立ち、座席より前側に位置する化粧室へと向かった。暫くして戻って来た。席に付いた忍の表情は固かった。心なしか緊張しているようであった。

「どうしたの？」

大黒が優しく声を掛けた。

「化粧室の近くに、変な人達がいるの」

「変なって？」

「手のところに毛布を掛けた人が三人。二人は白人で凄くきれいな女の人達だけ……。何か怖そうな感じでした。もうひとりはお若い男の人」

「そうか。俺もトイレに行ってくるか」

大黒も席を立ち、化粧室に向かった。忍の言うとおりであった。二人の極上とも言える美女達が、値踏みするように大黒の全身を視線で舐め上げた。人間の百万倍はあろう臭覚は、手錠の匂いを嗅いでいた。赤い毛布で隠されているが、女二人と男は手錠をかけられているに違いなかった。

女二人は、眩いばかりの金髪の持ち主で、モデルのように美しい顔立ちをしていた。男はラテン系の容姿をしており、頬に大きな傷を持っていた。スーツを着込んだ白人の男女が、彼らの脇を固めていた。大黒は彼らが護送中の犯罪者であることを一瞬で見抜いた。

「どうやら、犯罪者を護送中のようだね」

席に戻った大黒が、忍に耳打ちした。

「ええ。怖いわ」

忍の表情は心なしか青ざめていた。

「気にすることは無い。言っただろう。俺は最強のヴァンパイアだと。お嬢さんを命に代えて守って見せるよ。そうだ、俺にいい考えがある。ちよ

つと待ってて」

大黒は言い終えると、天井にあるボタンを押し、てキャビンアテンダントを呼んだ。

「トイレの近くに居るのは、護送中の犯罪者ですよね」

二十代後半に見えるキャビンアテンダントに小声で聞いた。

「ええ……。まあ……」

彼女は明らかに困惑の表情を浮かべ、押し黙った。

「連れが怖がってね。そうだファーストクラスに空きはあるかい？」

「済みません。生憎、この便にファーストクラスはありません。ビジネスクラスですと、空きはございますが」

近藤の野郎。この便にファーストクラスが無いことを知っていて、俺を騙しやがったなど、心中で毒付いた。

「ビジネスクラスは何処にあるの？」

「二階席でございます」

「よし。そこに移らせてもらおうよ。差額料金は払うから」

大黒は言うが早いか、自分と忍の荷物を片手で持って立ち上がった。

「いいアイデアだろう？」

ウィンクしながら、空いている方の手で忍を優しく立たせた。

「いいんですか？」

「忍お嬢様のためだったら、これぐらいお安いものさ」

大黒は忍の手を引いて、キャビンアテンダントの後に続いた。化粧室の近くを通る際に、犯罪者である女二人と男一人が、忍の全身を舐め回すように見詰めてきた。

男が口笛を吹いて、隣に座っていた白人の中年男に脇腹を肘で小突かれた。

大黒が忍に見えないように、冗談のつもりで女二人にウィンクして見せた。女二人も口を丸く開け、舌先で唇を舐め回す様な仕草を返して来た。

大黒は二人の悪魔的な匂いがする美女の口に、

男根を突っ込みたいという欲求を抑えながら、忍をエスコートし前に進んだ。

二階席にあるビジネスクラスには、空席が目立っていた。ビジネスクラスのシートは当然のことながら、エコノミーに比べゆったりとしていた。背もたれを倒し、レッグレストを上げれば、簡易ベッドに早代わりという優れものである。忍は二階席のビジネスクラスに移ってから、落ち着きを取り戻していた。

「お腹空かないかい？」

「少し空いてきました」

「そろそろ夕飯の時間だね」

最高のタイミングでキャビンアテンダントが、二人に近付き夕食のメニューを手渡した。二人とも洋食メニューを注文した。大黒は、メインディッシュが、ビーフステーキ赤ワインソース ポルチーニ添えを、忍はシーフード ノルマンディ風を選んだ。他にカナッペプレートやデザート等も付けられた。

飲み物は、大黒が、ボルドーのシャトー・ボーシット千九百九十七年物を、忍はウーロン茶を頼んだ。程なくして、キャビンアテンダントがトレイに載せられた夕食を運んで来た。

「これ食べていいよ」

大黒が、忍にビーフステーキを勧めた。

「食べないんですか？」

「俺はこいつがあれば満足さ」

カナツペを摘みながら、赤ワインを喉に流し込んだ。忍はクルマエビを美味しそうに頬張った。

「魚介類が好みなんだ？」

「はい。私エビが大好きなんです」

「俺もシーフードを頼めば良かったかな」

「いえ、ビーフステーキも好きですよ」

「デザートも食べるかい？」

「私を太らせてどうするつもりですか？」

「食べちゃおうかな」

「また、冗談ばかり」

忍は嬉しそうに笑った。

一瞬、大黒の視線が忍の白いうなじに向けられ

た。大黒に忍の血を吸おうと言う意思は無かった。好意を寄せた女の血は吸わないことにしていた。しかし、忍の血は甘いだろうなと心の中で呟いていた。

大黒が餌食にするのは、決まって性悪な美女であった。生命に危険が及ばない微量の血液をいただくだけではあるが。

大黒は忍が美味しそうに料理を食べる様子を目で楽しみながら、ゆったりとワインを飲んでいた。突然、機体がガクンといった感じで縦揺れを起こした。何時の間にか窓の外は大嵐になっていた。

「キヤー！」

忍が大黒の首にしがみ付いて来た。

「手違いが起こったらしい。ハリケーンに突っ込んでしまったようだ」

大黒は優しく忍の肩を抱いた。

「ただ今、当機は乱気流の関係で、激しく揺れています。もう少しで抜ける見込みですのでご安心下さい……」

機長の機内放送が終わらぬ内に、雷鳴が輝き昼

間のように明るくなった。間髪を入れず、左翼の方から大音響が聞こえてきた。エンジンのひとつに落雷し、火を噴いていた。火は見る間に広がり翌を焦がし始めた。揺れは収まるどころか、次第に激しくなっていくた。不意な感じで急降下を始めた。墜落するぞと大黒は咄嗟に考えた。近くにあった毛布をかき集め、忍の全身を覆い抱きしめた。少しでも衝撃を和らげるためだ。機はどんどん高度を下げて行った。不意な感じで水平飛行に移ったかと思うと二度、三度と大きくバウンドし停止した。衝撃で機内の荷物や椅子が宙を舞った。人々が上げる絶叫が機内に響き渡った。

「大丈夫か？」

忍は少しの間意識を失っていたようで、大黒の問いに答えられなかった。意識を戻し大黒に抱き付いて来た。恐怖のあまり嗚咽を漏らしていた。大黒は優しく忍を引き離し、毛布を剥いで怪我が無いか調べた。奇跡的に忍は無傷であった。

「大変。達也さん。怪我しているわよ！」

左手首に、椅子の部品である三十センチあまりの

スチール棒が突き抜けていた。大黒は忍のことを案じるあまり、苦痛を忘れていた。

「たいしたことはないよ」

大黒は、右手でスチール棒を一気に引き抜いた。鮮血が迸ったが、すぐに止まった。忍の目の前で、再生が始まっていた。見る間に大きな傷口が塞がっていく。忍は憑かれたように、その様子を見ていた。

「信じられない……」

「だから、言ったでしょう。オジサンはヴァンパイアだって。心配しなくていいよ。忍ちゃんの血は吸わないから」

言い終わらぬ内に大黒は周囲の状況を一瞬で把握した。大勢の人間が大怪我をして苦痛に呻いていた。無傷な者は数えるほどしかいなかった。荷物が散乱し足の踏み場も無かった。天井が裂け、豪雨が機内に侵入していた。

「ちよっと待ってて」

大黒は立ち上がり、天井の裂け目に手を差し入れて、機外に身を乗り出した。

周囲は十メートル近い荒波がうねり、暴風雨が吹き荒れていた。機体の後部が黒々とした太平洋の海面に没しようとしていた。大黒は、臭覚を最大限に高めた。かすかに木々の匂いを感じた。匂いの方角に視線を向けた。五キロほど離れたところに、微かではあるが陸地が見えた。その方角を記憶に刻み込んで、忍のもとに戻った。

「忍ちゃん。救命胴衣を身に付けるんだ！」

近くに転がっていた救命胴衣を忍に着せ、自分も同じように身に付けた。

「後、数分で機体は海に沈む。それまでに脱出するよ」

「他の人達はどうなるの？」

「残念だが、この状況では君ひとりを助けるのが、やっとなんだ」

大黒は話しながら、自分と忍のシートベルトを片手で引き抜いて、一本にまとめた。忍を背負い上げ、シートベルトで造った急造のロープで二人を結び付けた。さらに自分と忍の荷物も、近くの席から抜き取ったシートベルトで自分の身体に縛

り付けた。

「行くよ」

天井の裂け目に飛び付いて、一気に機外に飛び出した。大きく深呼吸して、大きくうねる黒々とした海面に飛び込んだ。

初夏とはいえ、北太平洋の水は、身を切るほどに冷たかった。大黒は不敵な笑みを浮かべ、両手両足で水をかいだ。通常人の数十倍はある体力がものをいった。強烈なストロークであつというまに、機体を離れ陸地に向かって泳ぎ進んだ。

その頃、沈みかかった機内では、犯罪者の三人が隙を付いて、護送役の刑事達に襲いかかっていた。二人の女のうち一人は、三十代前半に見える女刑事の大きな乳房に、奪った拳銃の銃口を押し付け、引き金を引いた。

胸を撃ち抜かれ、床に崩れ落ちた女刑事の懐から、鍵を取り出して手錠を外した。隣で掴み合っていた別の女刑事と犯罪人の女に近寄った。

美しい顔立ちをした二十代後半に見える女刑事の頭部に銃口を突き付けた。

「お止め！」

動きを止めた女刑事の表情が見る間に青ざめていった。女は女刑事を床に、仰向けの姿勢で横たわらせた。

「お願い。殺さないで。何でも言うことを聞くから」

「お黙り。時間が無いんだよ」

「でも、これだけは止められないよね」

解放された二人の女達は競うようにして、女刑事の衣服を脱がせ、全裸に剥いた。重たげな乳房や盛り上がった白い尻が女達の視線を貫いた。もうひとりの犯罪者である若いラテン系の男は、側に立って様子を眺めていた。護送役の刑事を絞め殺したばかりであった。

「こいつのオマ＊コ舐めたかったんだ」

「早くした方がいいよ。もうじき沈んじやうかもしれないから」

「わかっているよ。むぐ……」

女は女刑事の太腿を大きく開き、膣に口を付けた。ガツガツとした感じで膣やクリトリスを舐め回した。女刑事は両手で顔を押しさえ、泣きじゃくっていた。もうひとりも盛り上がった白い乳房を



舐め回していた。その時、機体が大きく傾いた。

「やばいよ！」

「おい。雌豚。四つん這いになりな！」

女刑事を四つん這いにさせ、背後から尻の合間を覗き込んだ。匂いを嗅ぎ少し舐ってから、女刑事が所持していたベレッタの銃口をアヌスに当たった。

「時間があつたら逝かせてやれたんだけどね」

言った後で引き金を引いた。低い銃声がして女刑事は背筋を仰げ反らせた、白目を剥いて床に横たわった。腹部に接した床面に鮮血が広がっていた。

犯罪者の三人は、救命胴衣を身に付け、壁に空いた大きな裂け目から外に飛び出して行った。

機外には救命胴衣を着た数十名の乗客とキャビンアテンダント等の乗員が、波間を漂っていた。非力な人間の力では、大きくうねる波をかき分け、先に進むことなど、到底不可能なことであった。皆、海流に流されるだけだ。

暫くして、砂浜に忍を背負った大黒が到達した。そこは海上とは打って変わって晴れていた。月明かりを頼りに、大黒は砂浜を歩き、山間地に分け入った。

「忍ちゃん。大丈夫か？」

背中の忍に語りかけるが返事は無かった。背中で、忍の体温と呼吸音を感じていた。忍は寒さのあまり、失神したものと思われる。

一刻も早く忍を暖める必要があった。五分ほど、両側に深い森がある、幅五メートル深さ二十センチほどの川原に到達した。

乾いた小砂利が敷き詰められた川原に忍を横たえた。忍の腕は氷のように冷たくなっていた。大黒は川原に散在する流木を拾い集め、さらに近くの森で松脂を探しあててそれを使って流木に着火した。火種は川原に転がっていた石を接触部分が、真っ赤になるまで擦り合わせたものを使用した。タバコを吸わない大黒はライターを持っていなかった。短時間のうちに石が焼けるまで擦り合わせることなど、大黒にとって造作も無いことだった。

数分もしないうちに、大きな焚き火が完成した。次に大黒は、焚き火を大きく取り囲むように、両手を使って重さ一トン近くの大岩を並べた。

大岩と焚き火の間に、忍を横たえた。躊躇いがちに忍の衣服を脱がせ始めた。すぐに眩いばかりに白く美しい裸身が現れた。忍を抱き上げ、ビニールでパッキングされ乾いていたタオルを敷き、再び仰向けに横たえた。

大黒も衣服をすべて脱ぎ去り全裸となった。二人の濡れた衣服を近くの大岩に掛けた。焚き火の輻射熱で、すぐに乾く筈である。

鍛え抜かれた肉体を持つ大黒の黒々とした裸身が、輝くばかりに美しく白い裸身を見下ろしていた。股間が痛いほどにいきり立っていた。そのとき大黒の両眼が赤々と燃え上がった。

大黒は何とか自分を抑え、ゆっくりとした動作で忍に肉体を重ね合わせた。

忍の冷え切った肉体を暖めるには、これしか手が無かった。体重を掛けないようにして忍の全身を自らの肉体で包み込んだ。

忍の柔らかな乳房や腰の膨らみを痛いほどに感じていた。張り裂けそうな欲情を押さえ込み、目を閉じた。

第三章 奴隸

その頃、大黒達が到達した場所から十キロほど離れた浜辺に、他の乗客と乗組員が漂着した。三人の犯罪者達も混じっていた。皆、消耗しきっており、暫くの間、砂浜に横たわっていた。最初に立ち上がったのは、三人の犯罪者達であった。他の乗客や乗組員達に銃を突きつけて、立ち上がり一箇所に集めた。乗員であるキャビンアテンダントが、緊急用のライトを持ち出していた。

犯罪者達はそれを使い、捕虜とした男女十四名を観察し、二つのグループに選り分けた。

一つ目のグループはキャビンアテンダントを含む十一人の若い女達であった。皆、日本人で美しい容貌と張切れそうに豊かな肢体の持ち主である。残りのグループは、中年を過ぎた男女三名であつ

た。犯罪者達は、膝間付かせた三人の男女に拳銃を向けた。

「弾がもったいないんじゃないかい」

犯罪者の女が冷たい声で言った。

「そうだな」

犯罪者の男が拳銃を降ろし、近くに落ちていた拳大の岩を拾い上げ、おもむろに近くに膝間付いていた男の頭部に叩き付けた。グシャリという鈍い音が聞こえ、中年男が砂浜に横たわった。全身を痙攣させる中年男の頭部に何度も何度も岩を叩き付けた。あまりに凄惨な光景に捕虜にされた若い女達が泣き叫んだ。失神する者もいた。

数分後、哀れな三人の犠牲者が砂浜に横たわり、頭部を割られ絶命していた。

犯罪者の男が、血塗れの手で一番近くにいた若い女に掴みかかった。必死の形相で悲鳴をあげる女を砂浜に押し倒した。

「何やってんだよ。アル！」

犯罪者の女が叫ぶように言った。

「決まってるんだだろうが。こましてやるのさ」

アルは女のスカートを抜き取ろうとしていた。
「いいかい。あたし達、ずぶ濡れで、何処ともわ
からない場所にいるんだよ！」

先ほどの犯罪者の女が叫ぶように言った。

「そうさ。隠れ家を先に見つけるべきだよ」

もう一人の女が、加勢するように言った。

「わかったよ。姉御達には敵わないな」

小一時間後、犯罪者とその捕虜達は、漂着した
砂浜から一キロほど分け入った河川敷に到達して
いた。幅五メートル水深が三十センチほどの清流
は、四十度くらいの温度であり、川そのものが温
泉となっていた。

「さあ。お前達、ここで着ている服を全部脱ぐん
だ」

月明かりの下で、犯罪者の女が、川原に佇む十
人の女達に拳銃を向けた。女達は先ほどの惨状を
思い出したのか、拒む者はいなかった。濡れた衣
服を脱ぎ全裸となった。極上の裸身が露となった。

「自己紹介しておくよ。アタイはベロニカ、こっ
ちはステラ。男の名はアルって言うんだ」

その後、女達にひとりずつ名前を名乗らせた。

「ベロニカ。こいつらにはご主人様と呼ばせようよ」

「いいな。俺も賛成だ」

「わかったね。今日からアタイ達がお前達のご主人様さ。逆らったら殺しちゃうからね。さあ、温泉タイムだよ。オマ＊コとケツをきれいに洗うんだ。それが終わったら十分に可愛がってあげるからね。アタイとステラはね、バイセクシャルなんだよ。両刀使ってやつさ。お前達みたいねイカス女が大好物でね」

「その前に、匂いをかがせてくれ」

アルが前に出て、女達の背後に膝間付き、ひとりずつ尻の割れ目に顔を入れ、匂いを嗅いだ。女達は皆、肩を震わせ嗚咽を漏らしていた。



「最高だぜ。メスの匂いは」

自分の唾液に塗れた顔をあげた。

「もう気が済んだろう。アンタは、寝床を探して来てちょうだい。それに焚き火もね」

ベロニカがうんざりした表情を浮かべた。

「まったく、人使いが荒いよ。姉さんは」

目の前の女の尻を驚掴みにしてから、その場を離れ、懐中電灯を頼りに周囲の探索に向かった。

ベロニカとステラは動きが鈍い女達を、次々と流れに蹴落としていった。

ベロニカが拳銃をかまえ見張り役になり、ステラは自らも全裸になって女達の間に分け入った。女達を流れの中に並べてうつ伏せに横たえた。盛り上がった十一個の白い尻が月明かりの下、川面に浮かんだ。順番にまるでダイコンでも水洗いするように手でアヌスや膣を洗った。それは執拗に行われた。女達の咽び泣きが溪谷に流れていった。

すぐにアルは河川敷近くの崖に、横穴を見付けた。内部を懐中電灯で照らしてみると、奥行きは十メートルほどであり、けっこう広い空間が広がっていることを確認した。地面も比較的乾いていた。中に入り、川原で集めた流木と乾いた小枝を使い、焚き火を作った。焚き火の近くに折れた枝を突き刺し、女達の衣服を掛けて暫くの間、乾かした。

三人は、川で汗を流した女達の後ろ手を紐で縛りつけ、焚き火で乾かした衣服を敷き詰めた地面に横たえた。

それから、本格的な陵辱が始まった。ベロニカ達は、ひとりで三人から四人の女達を組抱いた。ベロニカは、グラマーな体付きで可愛い顔をした女を抱いた。泣き喚く女の長い太腿を押し広げ、思う存分に性器を舐め回した。うつ伏せに横たえた二人の女のアヌスを指で犯し、もうひとりの女に、自分のアヌスを舐めさせていた。

ステラは二人の女にアヌスと膣を舐めさせていた。二人の女達は、必死に舐めていた。ステラ自身も他の二人の女を近くに横たえ、舌や手を使い膣やアヌスを犯していた。

アルはひとりの女にフェラチオを強要し、二人の女を仰向けにして、膣内に指を入れ激しい勢いでピストンさせていた。

陵辱は翌朝まで続けられた。三人は女達を抱きながら、順番に仮眠を取った。

翌朝は雲一つ無い快晴であった。犯罪者の三人は、明るくなってから、自分達や女達が持っている手荷物を確認した。三人はそれぞれが、機体か

らワインやビール等の酒類やスナック菓子を持ち出していた。

性交奴隷となった女達のうち、四人はキャビンアテンダントであり、一人が客達からの委託手荷物を持ち出していた。中には、スイス製のアーミーナイフやハンティングナイフが収められていた。秘境とも言える場所で最も必要な道具であった。他には衣料品がほとんどであった。結局食糧と言えるものは、スナック菓子が僅かばかりとアルコール類だけであった。水は近くに清んだ泉もあり十分に確保できた。三人は、洞窟の中で焚き火を囲むようにして座り、スナック菓子を食べていた。その周りに全裸にした女達を並べて横たえていた。

「腹が減ったな。これだけじゃ持たないぜ」

アルがスナック菓子をひとつ口に放り込んだ。

「アンタ男でしょう。狩りにでも行ってきなよ」

「そうだな。運がよければウサギでも捕まえられ
るかもな」

拳銃を手にして立ち上がった。暫くしてアルは手ぶらで戻って来た。

「駄目だ。野兎一匹見つからない」

「だと思ったよ。まったくだらしが無い男だね」

ベロニカがアルをなじる様に言った。

「あーあ。こいつらの肉が食えたらな」

ステラが溜息を漏らし、女の裸身を舐め回すように見た。

「食えるぜ。ダチが言っていたが、けっこう美味しいらしい」

アルの生唾を飲む音が聞こえてきた。

「あー」

その時、女達のひとりが声を出した。

「何だい？食われないのかい？」

ベロニカがその女の盛り上がった白い乳房を掴んだ。女は、香織という名の女子大生であり、美しい目鼻立ちをしていた。モデルといっても通用するだろう。

「提案があるのですけど」

女は、横になったまま滑らかな英語で話し出し

た。

「いいよ。言ってみな」

「海に行けば、貝とか見つかるんじゃないでしょうか？」

「貝だって！アタイはね。魚は駄目なんだよ。肉しか喉を通らないのさ。ステラだってそうさ」

「俺も魚は勘弁だな。でもこいつらだって何か食わせないと死んでしまうぞ。そしたら楽しめないぜ」

「そうだね。ガラガラになっちゃ、肉は取れないしね」

「ステラ。あんた。本当にこいつらを食うつもりかい？」

「だって。他に食うものが、なけりゃあ、しょうがないじゃないか」

「俺は賛成だな。あいつなんか美味そうな身体をしているぜ。まったく」

「よし。それじゃあ、家畜の餌を探しに行こう」
ベロニカが拳銃を手にして立ち上がった。

「決まりだな」

三人は女達を立たせ、全裸のまま洞窟から連れ出し、そこから一キロほど離れた海に向かって歩き出した。初夏とはいえ、緯度が高いせいか気温は低く、全裸の女達は肌を寄せ合うようにして歩いていた。海まで続く川原を進んだ。

温泉の川が流れる河口付近に魚介類の姿は見られなかったが、少し離れると遠浅の海底には、ハマグリやホタテ貝が群生していた。

捕虜の女達は、ベロニカ達に監視されながら、競うようにしてそれらを取り漁った。昨夜から何も食べていなかった。皆、一様に飢えていた。

女達は持っていたビニール袋いっぱいハマグリやホタテ貝やコンブ等の海藻類を収穫していた。それらを洞窟がある川原に持ち帰り、さっそく調理を始めた。調理といっても鍋が無いので、岩に空いた浅い穴に海からペットボトルに入れて持ち帰った海水を満たし、取ってきた貝類や海藻を入れ、焚き火で加熱した石を入れるという原始的なものであった。

貝類や海藻はすぐに茹で上がった。ベロニカや

ステラは本当に魚介類が嫌いらしく、周辺に漂う匂いに眉間をしかめ、近付こうとはしなかった。

女達は競うようにして、貝殻が開いたハマグリやホタテに齧り付いた。少し離れたところで、ベロニカ達が立ち話をしていた。

「どいつから喰う？香織という女は色々使えそうだから残しておきたいんだが」

「あの女がいいんじゃない。確か真由美とかいう名前だったよ」

アルの問いにステラが答えた。ステラは身長が百七十センチ以上あり、見事なプロポーションを持つ女を舐めるような視線で見詰めていた。

「いいね。あいつにしようぜ。おっぱいもケツもでかいから、たくさん肉が取れそうだ」

「どうやって料理する？」

ベロニカが二人の会話に割って入った。

「肛門から串刺しにして、丸焼きというのはどうだ？」

アルが真由美の尻に舐めるような視線を向けた。

「いいね。それにしよう。で、調味料はどうする

の？」

「海水を使えばいいさ」

「何か。涎がでてきたわ。食べる前に犯さない」

「そうだな。犯しまくって肉を柔らかくしようぜ」

「中に出したら駄目だよ。肉が臭くなるから」

「ステラ。お前が吸ってくれるか？」

「噛み切られてもいいのならね。腹が減っているからソーセージと間違えるかもね」

ステラはズボンの上からアルの男根を挿んだ。

第四章 人肉料理 へと続く